

特集

問い直そう、保育の中のアたりまえのこと

子どもの「やりたい」という気持ち

幼児保育・教育の世界で「あたりまえ」だと思われる事柄を取り上げて問い直す……。この特集テーマに沿い、前号の「子どもの視点に立つ」に続き、今回は、子どもの「やりたい」という気持ちを大切にしたい」とはそもそもどういうことなのか探ってみたいと思います。「やりたい」がすなわち自発性の表れなのでしょうか。「やりたい」という気持ちの底には何があるのか、どういう時に子どもは「やりたい」と思うのか、考えていきたいと思います。

(編集委員会)

安部富士男 (安部幼稚園園長)

佐藤寛子 (お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)

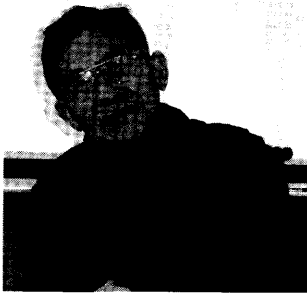
浜口順子 (お茶の水女子大学大学院准教授)

座談会

環境の中で生きる

浜口 今日(今日は土曜日なので幼稚園はお休みですが、地域の親子や卒園生などが、この自然豊かな安部幼稚園の園庭に遊びに来て、ウサギやヤギに触れていました。今日は、子どもの「やりたい」という思いについて考えてみたいと思います。今どきの子どもは「やる気」がないとか、遊ぼうとしない子どもが増えているとも言われますが……。

安部 この座談会のテーマをお聞きした時に、思い出した光景があります。ずいぶん前のことですが、A君という三歳児がいました。入園する前から、祖



▲安部富士男氏

父母を「僕の幼稚園に行こう」と連れてきていました(笑)。特に、鶏を見たり、ひよここと話したりするのが大好きだったのです。入園式の日には、「先生おは

よう！」と張り切ってやって来ました。次の日もお母さんの手を引く張るようにやって来て、保育室の玩具で遊び始めました。少しして振り返ってお母さんの姿がないのに気付くと、すぐに追いかけていて、門の所でお母さんに「帰っちゃダメ」と叫ぶのです。お母さんが「幼稚園は子どもの遊ぶ所よ。迎えに来るからね」とたしなめますが、なかなかA君は聞き入れません。私(園長)が「お母さん、ここに立っておられるといつまでも泣いているから、帰ってください」と言うと、A君は「帰れって言っちゃダメ」と私のほっぺをつねる。お母さんは、おろおろする。それでも「お母さん、大丈夫だから帰ってください」と言うと、お母さんは勇気を奮い起こして帰っていく。それを見てA君は、「お母さん、一目会いたい！」と叫んだ(笑)。そうしたら近くにいた近所のお母さんが「うちの子も同じでしたよ」と言ってくれる。その言葉に促されるようにして、A君のお母さんは帰っていきました。

二人の後ろ姿を見て、子離れするのは仲間に支え

られてなんだな、と私は実感しました。私はA君を抱いたまま、A君の大好きな鶏小屋に行きました。「ひよこさんがA君、おはようって言っているよ」と私が言うと、A君はまったく別の方をぶいと向く。その表情を見て私は「ああ、いい子だな。自分の意志をもっている」と感じた。すると、四歳児が「ひよこ、なぜ黄色いの？」と聞いてくる。私はどう答えようかと迷っていたが、五歳の子が「ゆで卵の黄身がおっぱいだからだよ」と答えてくれる。ひよこが生まれると、子どもたちが家庭から、ゆで卵の黄身のおすそ分けを持ってきます。年長の子は四月、最高学年ですからね、胸を張って答えてくれるわけです。四歳児はそれで納得しちゃった。私は答えなくて済んでほっとした。そうしたら、私に抱かれていたA君が、ひよこの方に顔を向けた。それを見て、子どもは子どもの中で自分の興味関心の世界を広げていくんだな、と思いました。それでも十日間くらいでしょうが、朝、門の所で大泣きをするのが続いた。すると園長が抱っこして、ひよこを見に行く。

お母さんもわかっていて、ゆで卵の黄身を持たせてくれたので、それをひよこにやっていました。

五月の連休明け。疲れたんでしょね、微熱を出した。お母さんから電話で、「僕が行かないと、ひよこが死んじゃう、幼稚園に行く、と言っています。どうしましょう」。「熱がある時は休ませてください。でも何度ですか?」「七度近いんです」「平熱は?」それなら、餌だけあげに来たら? 担任に話しておくから」。それでA君は意気揚々と幼稚園にやって来た。ひよこにゆで卵の黄身をやつてから、「明日もよろしくね」と言うと、「ひよこさんの朝ご飯、持つてくるからね」と帰っていききました。

やはり幼稚園教育の基本は環境による教育です。その中で大事なのは、人間関係。「一目会いたい」と言われて、お母さんが地面に根っこが生えたように立ち尽くしていた時、近所のお母さんが大丈夫よと、声をかけてくれる。園長が鶏小屋にA君を連れていく。小さい仲間たちにも支えられている。命あるものとの出会い、自然との出会いが、彼を自立させ、

彼の興味関心の世界を豊かにするのです。

熱が出ても幼稚園に行くという、夢をもって生きる。希望をもって生きることが自立を促します。ひよこに興味をもっている子どもたちの姿を見て、ひよこの絵本を読んであげたり、ひよこの手遊びをしたりする。文化との出会いが自立を下支えする。環境としての人間、自然、文化が織りなして、彼の独り立ちを促します。ひよこに餌をあげるという目当て、希望をもって、A君は三歳のひとときを過ごし始めたのですね。

佐藤 お母さんをほかのお母さんが支え、A君を子どもたちが支える。その間には、先生がいます。A



▲佐藤寛子氏

君は大人に「引き離された」と言うこともできません。一見、引き離しているのだけれども、先生の仕事はつながりをつけていくということ。親子の別れがあつたから見えて

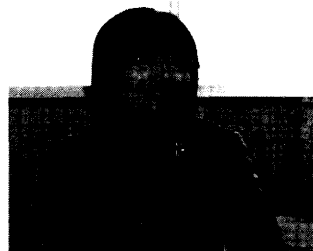
きたつながりがあり、つながっているんだと実感できることになつたのでしょうか。

安部 私は、保育は出会いと別れのある生活だと思います。しかし別れというのはより深くつながるための別れ。でも「お母さん、帰りなさい」と言ったのは、A君だから言ったのです。別の子どもだったら、そうは言わなかつたかもしれません。A君とのつながりに自信があつたからです。

佐藤 いつも引き離したほうがいいなどと一般的には言えませんね。

子どもの優しさに支えられて

浜口 先生の子どものとかかわり方で、子どもにも思いも寄らない強さとか優しさを見せつけられた時にハッとするとというのが印象的です。先程のA君にしても、ひよこだよ、



▲浜口順子氏

と先生が見せたらぶいと横を向いてしまう。それを見て、「ああ、いい子だな」と思われている。普通だったら「何だ、そっぽを向いて」と思うかもしれないのに。

安部 こんなことがありました。ある子どもに誘われて一緒にお弁当を食べていた時、向かい側の子どもが箸を宙に浮かしたまま、私の顔をじっと見ている。そして突然大きな声で、「おれが大人になった時に、園長先生死んでいるよな」って。私はどききとして、「ほんとだね。Tちゃんが好きな人と出会って結婚して、赤ちゃん生まれて、園長先生、僕の赤ちゃんだよと見せに来てくれるまで生きていたけど無理だよな」。そう言った語尾に寂しさがあつたんでしようね。隣の女の子が、彼と私を見比べて「園長先生、外から帰ったら、うがいのよ。おてても洗うのよ。そうすれば風邪引かないから、元気でいられるわよ。私も私の赤ちゃん見せに来るから」。私は本当に涙が出そうになりながら、お弁当を食べていました。

こうして、日常的に、子どもに支えられて生きている。いろいろな辛いことがあっても、わが子の寝顔を見たり、生理的な反射の赤ちゃんの微笑を見ても元氣が出る。幼い子どもの笑顔を見てみると、自分を立て直すひとときになる。それを大事にすると、子どもの心を受け止める力になると思うんですよ。

子ども同士がつくる生活・文化

浜口 先程、地域から来ていた小さい幼児が、先生がウサギに干し草をやっているのを見て、「やりた」と言っていました。母親が近くにいたから、安心して一歩前に進み出られたというふうに見えました。自分がお母さんから離れて、今度は自分がウサギのためにと踏み出す、そんな関係の循環のようなものにも見えました。A君はというと、大人に言われているうちはそっぽを向いていたけれど、子どもの中で歩み出た。人とかかわりの中で、前に進んでいる自分を感じていたようにも思えますね。

安部 うちにはチャボやウサギやヤギがいますが、

年中の子どもにも年長の子たちが世話の仕方を教えます。チャボの餌の野菜の刻み方や、床の糞の掃除。ジェットで洗うんですよ。ヤギを散歩に連れていく時も、動かない時には口の前に餌をやるというなどと教える。子どもたちは、家からキャベツとかニンジンとか持ってやって来て、今度は僕がヤギ係、今度は私がウサギ係！と、毎朝張り切ってやって来ます。

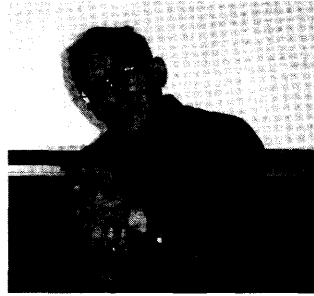
子どもが子どもに、生活の有り様、文化を伝えていくのですね。これが子どもの中のやりたい気持ちを引き張り出していきます。その前提には、小さい時に、こわごわ餌をあげたり、年長が世話している様子を見たりした経験がある。ヤギの散歩から帰る時、園庭の丘の尾根の所でヤギのひもを引っ張りきれなくて手を離すことがある。小さい子にぶつかると危ないから、離す前に年長児が先回りして「今、誰もいないぞ」と言う。手を離してもヤギが自分で小屋に入ってくる。子どもが子どもに支えられながら、園生活を組み立てているのです。今度は自分た

ちが担うんだ、恐る恐るでも担うんだ、というのが大切な。お母さんにも支えられて、そういう関係の中で目当てをつくって生活しているんだなと思います。

佐藤 友達とのかかわりの中で、生活の中で、わき上がってくる「やりたい」という気持ち。「自分もできるかも」という気持ち。先生のご本※の中に、卒業した小学四年生の男の子が「おんぶしてもらいたい」と戻ってくる話がありますね。小さいころに、生きる楽しさをつかめた人って、大きくなった時に戻れる場所がある。幼い時の体に戻って、友達や先生のことを思い出す。やりたいことをやる、ということ、今だけではなく、先につながっていくことなのでしよう。

自然という環境

安部 「やりたい」という気持ちを子どもたちの中に豊かにはぐくむ背景に、自然との出会い、がある気がします。幼稚園の森の中に、落ち葉がうず高く



積もっている。そこに何人かの子どもが寝転がって、じゃれ遊びしている。明るい日差しが子どもを包んでいる。そういう何気ない生活の中で、自然が子どもの中に豊かな情動をはぐくむのではないのでしょうか。それが感性の発達に、さらには認識とか知性の発達に大きく寄与している。幼児期はもつと情動の発達に重きを置くことが大事です。

語源辞典でスクールの語源を見るとね、レジヤ、つまり「癒される」。学校っていうのはね、癒される場所。幼稚園も学校でしょ。癒されて興味関心の世界を豊かにして、自己課題を発見して、課題を追求していく。とりわけ幼児期は、癒される場所があることが重要で、それが意欲を支えるベースになっているんじゃないかと思うんですよ。

浜口 この幼稚園を癒しの場Ⅱスクールにするため

に、先生は非常なご苦労と努力を重ねてこられたのですね。ここに用意した環境は、本当の意味での自然とはいえないかもしれません。でも子どもはあたりまえの自然だと思って生きている。環境として、先生が用意したスクールで、子どもは自分からやりたいという気持ちを育てている。そういう力が自然にはあるのですね。

安部 私の大学院時代の研究課題は大正期の自由教育だったんです。その中で特に幼児教育にかかわりをもっておられた及川平治、橋詰良一、倉橋惣三とかね。三人とも、とても自然を大切にする視点をもっていました。私はそれを自分の幼稚園づくりに生かしていきたいと思いました。自分の園内の敷地だけを考えない、教師や子どもが安心して往復できる所はみんな園庭なんだと考えてカリキュラムを作った。幼稚園を開くために手に入れた最初の土地は、当時アルバイト学生でしたからとても小さかった。でも周りには田んぼも畑も山も牧場もあり、全部わが園庭でした。ところがだんだん開発されていった

ので、仕方なく敷地の中に自然を取り込むようにしました。

及川は園芸や飼育栽培も、園児の情操をはぐくむ場として大切だと考えていました。だから僕はどうしても畑と飼育コーナーが欲しかった。飼育には、子どもが全力を挙げてかかわらないと世話できない動物がいいと考えました。でも、幼児には牛とか馬は無理だから、羊とかヤギにした。羊はね、フェルトを作ったりしていい素材がとれる。だけど羊というのは家畜化されているので毒草を食べてしまうのです。野生化しているヤギは毒草を食べてしまうの落とすのは悲しい体験だから、ヤギに切り替えた。

佐藤 先生ご自身、小さいころは、そういう自然豊かな環境で育ってこられたのですか。

安部 私が比較的長く居たのは静岡ですが、父はここで旧制高校の柔道の師範をしていた。自宅近くにある練兵場で、よく凧揚げしていたものです。

浜口 農家ではなく、町で育ったのですね。

安部 そうです。一度、父と山歩きした時に、ハヤ

ブサが倒れていた。まだ生きていた。かわいそうだから連れて帰ろうと駆け寄ろうとしたら、「危ない」と父が止めた。そして父がつかもうしたら、突かれて父の手から血が噴き出た。その時、父の言ったことがわかった。父と一緒にお店に行つて飼いを教わつて、畳一畳くらいの大きな鳥小屋を作りました。餌のヤツメウナギなら捕れるから、生きているのをハヤブサにあげていた。でも一か月くらいで命を落しました。裏庭のサザンカの根元に墓を作つて埋葬した。動物にかかわつた思い出はそのくらいですね。

佐藤 それでは、ヤギを飼われたのは、子どもたちと過ごすようになってからですな。

安部 はい。ヤギの赤ちゃんが生まれた時は、面白かったよ。話を聞きつけて学校帰りに小学生が寄る。「おでこだけ白いよ。お母さんは茶色なのに」。すると五歳の子が「卵をおでこで割つてきたからおでこが白い」と言う。たまたま、母鶏が卵を突いてくれただお陰で、ひよこが自分の卵を割つて出てくるのを

見ていたんですね。すると三歳の子は腕を広げて「こんなに大きな卵だ」と言う。自然というのは、子どもにいろいろな発見や活動の課題を与えてくれます。

浜口 ヤギが卵から生まれたと言おうが、その場はそれでいいわけですよ。

佐藤 自然がいいのは、生きているからですかね。

安部 自然を取り入れた生活ですね。倉橋先生が「生活を生活で生活へ」と言っているね。労作のある生活。子どもたちが大根なんか作るでしょ。種をまいて作る。八百屋のものと違っているんです。プクッとふくらんでいるところがあつたりすると、洗った後で、お母さんのおっぱいだあ、と子どもが頬を寄せる。毎年、収穫する生の大根は、スライスして食べています。甘味があります。今年は大根の葉っぱも食べてみたら、やはり甘かったです。

浜口 自然とのかかわりを嫌がる子どもはいませんか。いつか変わっていくでしょうか。

安部 根っこに、泥遊びがあるでしょ。でも泥を嫌がる子がいる。空き缶の底に穴をあけて水を入れて、

グラウンドを駆け回ると、不思議な模様ができる。思わずしゃがみこんで土に触る。それで汚れて帰るとお母さんに叱られたりする。

でも、面白い。思わず土とかがわるような活動を大切に。砂とか泥と馴染んでいく生活があつて、それ

をたつぷり楽しんで、畑にかかわっていく。思わず土に触れ、心地良さを体験していく。そういうのを最初に保障するといい。

浜口 無理にはしないのですよね。

安部 マンションの生活では、土に触れる場はないですからね。

浜口 今日はありがとうございます。

(二〇一二年二月十九日)

注 安部富士男『人との交わりを支えに生まれた幼児教育』

新読書社 二〇〇五年

